

令和五年十一月度御講

高橋入道殿御返事

(御書八八七(六)五行目〜七行目)

【本文】

末法に入りなば迦葉・阿難等、文殊・弥勒菩薩等、薬王・観音等のゆづられしところの小乗経・大乘経並びに法華経は、文字はありとも衆生の病の薬とはなるべからず。所謂病は重し薬はあさし。其の時上行菩薩出現して妙法蓮華経の五字を一閻浮提の一切衆生にさづくべし。

【通釈】

末法に入ると迦葉・阿難等、文殊・弥勒菩薩等、薬王・観音等が譲られた小乗経・大乘経ならびに法華経は、文字はあつても衆生の病の薬となることは決してない。言わば、病は重く薬(の効果)は浅いということである。その時上行菩薩が出現して、妙法蓮華経の五字を一閻浮提の一切衆生に授けるのである。

【主な語句の解説】

迦葉・阿難：ともに釈尊の十大弟子。釈尊滅後に付法蔵の第一・第二として經典結集を行い、小乗経を弘通した。
文殊・弥勒：文殊菩薩と弥勒菩薩。釈尊在世にその化導を助けた。正法時代(像法時代とも)に再び出現し、諸大乘経を弘めたとされる。
薬王・観音：薬王菩薩と観世音菩薩。薬王は天台大師、観音は南岳大師として像法時代に再誕し、迹門を中心に法華経を弘めた。
上行菩薩：法華経從地涌出品第十五に出現する地涌の菩薩の之首。法華経如来神力品第二十一において釈尊から結要付嘱を承け、滅後末法の妙法弘通を託された。

【背景と大意】

本抄は、建治元(一二七五)年七月十二日、日蓮大聖人御年五十四歳の時、身延において認められ、駿河国富士郡賀島(現在の静岡県富士市)に住む、高橋六郎兵衛入道に与えられたお手紙です。高橋家は、姻戚関係にあった日興上人の教化によって入信したものと考えられます。

内容は、まず釈尊が迦葉等の弟子や文殊等の菩薩に、滅後正法・像法時代の衆生救済を託したものの、八万聖教の肝心・法華経の眼目である妙法蓮華経の五字については、ただ上行菩薩のみに譲られたことを示されます。そして拝読の箇所では、末法の衆生の身心にわたる重病を癒やすには、上行菩薩が付嘱された妙法五字でなければならぬことを教えられています。続けて、法華経の文々句々を悉く身読し、忍難弘通の日々を送られた御自身こそ法華経の行者、すなわち上行菩薩の再誕であり、大聖人が説き示される南無妙法蓮華経だけが、成仏の直道である旨を教示されます。

さらに、当時、朝廷や幕府に重んじられていた真言宗は大悪法であると説き、阿闍世王の悪瘡平癒の例を挙げて、大良薬である妙法を固く信じて病気を克服するよう闘病中の高橋入道を励まされ、本抄を結ばれています。

○末法の良薬は南無妙法蓮華經のみ

大聖人は、拜読の御文に「末法に入りなば(中略)文字はありとも衆生の病の薬とはなるべからず」と仰せです。末法は白法隠没びやくほうおんぼつと説かれるとおり、爾前諸經に功德がないばかりか、法華經でさえも衆生救済の効力を失います。

末法の衆生は皆三毒強盛で、正法に背く様から重病に譬えられ、その病のために社会も乱れ悪世となります。この重病には、浅い教えでは全く薬とはならず、寿命文底秘沈の南無妙法蓮華經のみが末法の衆生を救う大良薬となり、この妙法を弘める御方が、上行菩薩の再誕・御本仏日蓮大聖人なのです。

『聖愚問答抄』には、「豈(あ)知るも知らざるも服せん者煩惱の病ひ愈えざるべしや。病者は薬をもしらず病をも弁へずといへども服すれば必ず愈ゆ」(御書四〇八)と教示されます。薬の効能を知らずとも薬を服用すれば自然と病が癒えるように、私達は南無妙法蓮華經の教えをすべて理解できなくても、大聖人が妙法の当体として御凶顕された御本尊を信じ、題目を唱えることにより、即身成仏の大功德を受けることができます。

○すべての人にこの信心を伝えよう

コロナ禍は、一頃より落ち着いたとはいえ、まだまだ予断を許しません。この他にも戦乱や災害など、社会を襲う苦難は後を絶たないのが現状です。

本抄の末文には、「閻浮の内の人病の身なり、法華經の薬あり、三事すでに相応しぬ、一身いかでかたすからざるべき」(御書八九一)とあります。この御文について、総本山第六十七世日蓮上人は「『法力』が法華經の力、『仏力』が日蓮大聖人様、『信力』『行力』を一つにしたものが、閻浮提人の病の者たち(中略)その『仏力』『法力』『信力』『行力』が一つになって、三事相応して真の利益を得ることができる」(大白法・平成七年十一月十六日号)と指南されています。末法の衆生が受けるあらゆる苦難の原因は謗法にあり、それらを根本的に解決できる術(すべ)は南無妙法蓮華經の大良薬しかありません。私達は、このことを、世の中のすべての人に伝えていく使命があるのです。

まずは、自分の周りにいる大切な人を、この妙法の功德で救ってまいりましょう。そして、その輪を少しずつでも広げていくのです。大聖人の願いは、一切衆生の救済なのですから、広宣流布の大願成就を常に御祈念し、そのための努力を惜しまず実践していこうではありませんか。

○日如上人御指南

すべての講中が一天広布を目指して一致団結し、身軽法重・死身弘法の御聖訓のままに、勇躍ゆうやくとして大折伏戦を展開し、もって全支部が必ず本年度の折伏誓願を達成されますよう心から祈ります。(大日蓮・令和五年三月号)

今一度自らの信心姿勢を見直し、決意も新たに折伏に挑戦していきましょう。そして「一致団結」のお言葉どおり、常に励まし合って、残りわずかとなった『折伏躍動の年』を、唱題、折伏、育成にと、悔いなく戦いきってまいりましょう。